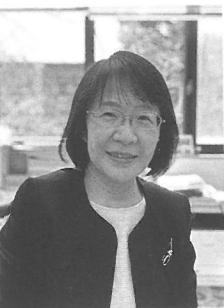


第5回

誇り高い4歳児

友達を見る眼をゆたかに、 おおらかに



鳥取大学

寺川志奈子

てらかわ しなこ／鳥取大学地域学部。研究テーマは「子どもの自我、自己、および社会性の発達と教育的支援」について。共著に『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価1 子どもの「ねがい」と授業づくり』(クリエイツかもがわ)など

「だつて4歳だから」

4歳児クラスにあがつた結ちゃんは、「結ちゃんは4歳だから……」と、事あるごとに言っています。2歳の小さなお友だちが結ちゃんが遊んでいたスプーンを「あつたー」と取ったので、先生が「貸してって言おうね」と声かけしていると、「いいよ、結ちゃん4歳だから貸してあげる」と胸を張って言います。ワニさんの口に見立てた卵パックでパクッと手を噛むふりをされた時も、「結ちゃんは4歳だからぜんぜん痛くない」と落ち着いた様子です。そうした姿からは、4歳児の大きくなつた自分への「誇り」といったものが感じられます。

このクラスに、忍者から「島に宝物を隠したから見つけに来てくれ」という手紙がやつてきました。子どもたちは忍者になりきつて、手作りの双眼鏡と手裏剣を持って宝探しの遠足に出かけました。そしていよいよ宝探しです。宝の地図を手がかりに、保育士が子どもの数ほど仕掛けた宝物（それは金ピカの松ぼっくり）を探します。なかなか見つけられない子どももいるなかで、拓くんは宝物を2つ見つけました。両手に持つて満面の笑顔。でも、見つけられなかつた友だちが近くでしょんぼりしています。先生が「○○ちゃんがまだ見つけられてないんだけどなあ」「拓くんが分けてくれたらうれしいと思うんだけどなあ」と、拓くんにお願いをしました。拓くんは両手に持つた宝物を見つめて神妙な顔をしています。それから「しばらくの間」があつて、拓くんはちょっと

と照れたようにからだをよじりながら、とうとう宝物の1つを友だちに渡してあげました。「ありがとう。拓くん、かっこいい！」とみんなからの称賛を浴びて、照れながらも誇らしげな拓くんでした。

4歳頃から、言葉は外に向けたコミュニケーションの手段（外言）としての機能だけでなく、自分に向けた思考の手段（内言）としての機能を持ち始めるときっています（ヴィゴツキー、2001参考）。拓くんが宝物の1つを自ら手放すまでの「しばらくの間」は、「宝物を渡したくないケレドモお友だちにあげようかな、ケレドモやつぱり渡したくない……」そんな言葉を自分に向けながら、「ケレドモ……、ケレドモ……」と、心の中で葛藤していた時間だったと思われます。そして拓くんはついにその葛藤を自ら乗り越えて、友だちに宝物の1つを分けてあげるという選択をします。それは誰かに言わされたから我慢したのではありません。他ならぬ拓くんの、大きくなつた自分への「誇り」が自分で自分を励ましながら、自分の気持ちや行動を制御して、勇気ある一步を踏み出すことを支えたのではないでしょうか。またそれは、拓くんが自ら決めるなどを励ましながらゆつたりと待ち、見守つてくれた先生の支援に支えられてこそその姿だったと思います。友だちに宝物を譲つてあげることができた拓くんは、そんなかつこいい新しい自分を感じられたことで、また自分への誇らしい気持ちが高まつたのではないかでしょうか。

一方で、「睨まれた」「無視された」と言葉で訴えるようになつたのは、4歳になつて相手の行動の背景にある「思い」を推測する力を持ち始めたからだとみることができます。「仲良くしたいけど、相手はどんなふうに思つているのかな、自分がすることを好きでいてくれるかな」そんな思いが芽生えてきたからこそ、友だちの行動がとても気になりはじめたのです。ただ、子どもからそのような訴えを聞くと、その場を見ていらない親としては事実関係をもつと知りたくなりります。心配のあまり「今日は大丈夫だった?」「誰かに意地悪されていない?」と、子どもからの訴えがないのに聞き出そうと必要以上に迫つてしまつます。心地よい親として、園でほと

友だちの「思い」が気になりはじめる